

2016-12 No.355

森林レクリエーション

特集 全国に広がるロングトレイル



大根干す (大根干し 静岡県伊豆の国市)

全国に広がるロングトレイル

特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会代表理事

中村 達



ロングトレイルが注目されている。2012年11月「日経トレンド」に、2013年のヒット予想の第1位になって以来、TVや新聞など多くのメディアに取り上げられている。また、今年からはじまった祝日『山の日』でも、主要コンテンツの一つになっている。

TVではNHKのゴールデンアワーで、北海道中標津町の北根室ランチウェイが紹介されたほか、BSでは日経プラス10で特集が組まれた。

アウトドアや登山誌はもちろん、トレンド誌、モノ雑誌、ファッション誌、あるいは機内誌などでも掲載されている。新聞では全国紙、ブロック紙のほか、地元紙ではほぼすべてのトレイルが報道されている。

また、ロングトレイルは映画にもなり、ロバート・レッドフォード主演の『ロング・トレイル!』（原題A Walk in the Woods!）がこの夏公開された。（当協会推薦）この映画は米国のアパラチアトレイルを舞台に、主人公が人生を考え直すという実話に基づいている。

昨年は、ふとしたきっかけでパシフィック・クレストトレイル（PCT）を歩き、人生をリセットした『わたしに会うまでの1600キロ』（原作「WILD」シェリ・ストレイド著 静山社刊）が出版され、ほぼ同時に映画化された。ドラッグに溺れ離婚も経験した主人公が、PCTを幾度も挫折しそうになりなが

ら歩き続け、新たな人生を踏み出すという実話である。この映画はアカデミー賞にノミネートされた。

私が知る限りアウトドアレジャーやアクティビティで、これほど継続してメディアを賑わしたものは少ない。

現在、日本ロングトレイル協会に加入しているトレイル運営団体は18団体で、総距離はおよそ1,800kmとなっている。延伸を計画しているトレイルも多く、さらに、計画中や構想段階のものも相当数にのぼる。信越トレイルは新潟県の苗場山への延伸



全国に広がるロングトレイル

を、当局や関係団体などと協議中である。佐渡島ではすでに協議会が設立され、ルートの調査が始まった。群馬県は県境の山稜に計画中で、モニターツアーが開催された。滋賀県では、比叡山から比良山系を通して、高島トレイルにつながるルートの検討が、延暦寺や山岳団体、高島トレイルクラブなどで始まっている。さらに、長野県、淡路島、四国、九州などでも整備が検討されている。

ロングトレイルの運営団体は、自治体、NPO、観光協会、登山愛好団体などで、地域観光の活性化がほぼ共通した目的になっている。

ロングトレイルは ブームで出来るものではない

ロングトレイルはブームとも言われるが、決して簡単には出来るものではない。まず、コンセプトをつくり、ルートを決めなければならない。基本構想が出来た段階で想定したルート歩き、問題点を見つけ、解決する方法を探らなければならない。地権者との折衝は大きな課題で、国や自治体のほか、民有地や入会権が設けられている地域もあり、合意形成と許諾が必要だ。また、地域住民の理解と賛同を得ることも大切である。さらに、関係する自治体、警察署、消防署、森林管理署、森林組合、観光協会などの協力も欠かせない。

この種の基本事項をクリアするだけで、最低でも数年はかかる。そして、地図、道

標や案内表示の製作と設置、ホームページの作成、安全管理、環境保護への取り組み、事務局の設置などを行う必要がある。

コースによっては廃道や利用者の少ない道もあり、整備作業は一から始めなければならないところもある。トイレの設置やテント場の整備なども、必要になる場合がある。また、事故対策や救助体制の構築も必要不可欠で、地元自治体、警察署、消防署、森林管理署、森林組合、観光協会などの協力がいる。

そして、トレイルが整備できるのと並行して、多くのハイカーの利用促進のためのPRが大変重要で、ホームページの製作やSNSを利用した情報の発信も必要な作業となる。

このようにロングトレイルの整備には、数多くの課題と作業があり、これらを一つひとつクリアしていくためには数年単位の期間がいる。一般的に、構想から整備を終えてPRまでで、最低でも5、6年は必要だろう。だからブームで出来るものではないのだ。

整備が先行、

ハイカーがあとからやってくる

アパラチアントレイルは約70年が経過し、映画化もされるようになった。英国のフットパスはおよそ300年の歴史があり、戦後、歩く権利（Right of a way）として法制化された。スペインのサンチャゴ・デ・コンポステーラは千年の歴史を誇るが、日



国東半島峯道ロングトレイル



白山白川郷トレイル

本の信仰の道はそれより長い歴史があるとされている。歩く旅の道は信仰の道として、古くから日本人の心の中に脈々とうち継がれてきたともいえる。

しかし、ロングトレイルはようやく知られてきた段階であり、多くのハイカーが歩くには周知期間が必要だ。現状では注目度は高いが、どちらかというと運営側、つまりトレイルをつくる側に視点が向けられがちだと思う。多くの人たちが各地のロングトレイルを歩くには、いまだ少し時間がかかる。

日本のロングトレイルの先駆けである長野県の「信越トレイル」は、開通して10年が経過し、ようやく年間3万人を超えるハイカーが歩くようになった。滋賀県の「高島トレイル」も、毎年5万人が訪れるようになって市民権を得た。

ロングトレイルの整備目的は 地域観光の活性化

ロングトレイルの整備目的の最大のもの、は、地域観光の活性化だろう。ハイカーがロングトレイルを歩いて、楽しみ、食べ、泊まる、というところに観光ビジネスが発生し雇用が生まれる。このストラテジーをいかに地域の特性に合わせて構築するかが問われている。

北根室ランチウェイは整備4年目を迎えて、シーズンにはハイカーが絶え間なく歩き、外国人も多くなった。東京からは交通費だけでも5万円を超えるというのに、で

ある。宿泊施設の増設や土産物の販売、そのため、ビジターセンターの設置などが検討課題となっている。新たな人材の雇用も急がれている。

長野県の浅間・八ヶ岳パノラマトレイルは、里山に整備されたトレイルで、近隣の住民が日常的な散策やウォーキングのコースとして利用し始めている。特に目立つのが、周辺施設や観光で訪れる外国人の姿で、新たな観光資源となりつつある。

スキー産業の衰退が言われて久しいが、それに代わる新たなものとしてロングトレイルが期待されている。その筆頭は、信越トレイルだ。飯山市は日本有数の豪雪地帯にあり、当地のスキー場は隆盛を極めていた。しかし、スキー人気が低迷して、厳しい状態が続いている。もちろん、かつてのスキー客を補てんするには至っていないが、少しずつ宿泊客が増えている。「信越トレイルのお陰です。」という民宿の声も聞こえてきている。

高島トレイルは、ハイカーが立ち寄る道の駅や宿泊数の増加で、高島市観光の有力ツールとなっている。広島県の湾岸トレイルは完成したばかりだが、来県する観光客への歩く観光ルートとして期待されている。鳥取県が主導する山陰海岸ジオパークトレイルは、観光コンテンツの一つになった。ジオパークを歩いて巡るのは、ジオパーク自体が持つ観光資源を補完する有力なコンテンツになると期待されている。



北根室ランチウェイ



浅間・八ヶ岳パノラマトレイル



ハケ岳山麓スーパートレイル



信越トレイル

青少年の体験活動にロングトレイルを

修学旅行や体験学習のフィールドに、ロングトレイルを利用する学校が増えつつある。ハケ岳山麓スーパートレイル（200km）では、トレイルを歩く学校が増えている。野外教育施設を使うだけではなく、歩くことで自然環境や地勢などを学習する体験活動だ。「今回の体験では20kmを歩いたが、残りの180kmは一生の宿題にしてほしい。」と、児童生徒たちに呼びかけているようだ。

高島トレイルでは中学校が体験学習にトレイルを活用している。中央分水嶺が走る高島トレイルは、核心部で東にびわ湖、西に日本海が見える。また、標高が800mの低山にもかかわらず、日本海から吹き抜ける風が強く草原地帯となった稜線が続き、自然体験学習にも大変有用だとされている。

信越トレイルは地元小中学校の野外活動の場として定着している。北根室ランチウェイでは、子どもたちに牧場内のトレイルを歩いてもらっているようだ。子どもたちが歩いてくれると、すぐに道ができるといふ。子どもたちも牧場内の草地を歩けるので大喜びだそうだ。道づくりと体験学習の一石二鳥である。

このようにロングトレイルは、児童青少年の体験学習の場として利用され始めている。

ルート図はスマホを活用

当協会ではスマホによるルート図の提供を、公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団の支援で行っている。近い将来、スマホのバッテリー充電量の画期的な伸びや、GPSの精度の向上が期待され、山岳地域でのスマホ利用が飛躍的に広がると予想されている。そのため、ロングトレイルでのスマホによるルート図活用が活発になると考え、現在10トレイル運営団体に各トレイルマップとルート図のデジタル化とアプリの提供を行っている。さらに、加盟団体の希望によって随時増やしていく予定である。

おわりに

ロングトレイルが注目されているのは健康づくりだけでなく、自然、旅などのコンテンツがはっきりと見えるからだろう。ロングトレイルは中高年者だけでなく、スルーハイカーの多くは若者たちであり、また、若い女性が目立つのも特徴的だ。

もちろん、旅行社が主催するトレイルツアーは中高年者が多く、健康と癒し、仲間づくりなどが目的だ。一方で、インバウンドで訪れる外国人観光客の自然指向は顕著で、日本の美しい自然へ、山へと向いは始めている。ロングトレイルは彼らにとって、「歩く旅」の格好のルートである。

多くの若者や外国人たちが、バックパッカーで森の中を歩けば、日本の未来も明るいと期待している。